

○11 番（宮原隆昌君）

11 番、宮原です。

小豆島八十八ヶ所霊場や文化財を観光資源としてさらなる地域活性化について質問いたします。

小豆島の観光は、自然やアート、グルメだけでなく、かなり深く「宗教文化」と結びついていると言えます。特に中心となるのは「遍路文化」と「山岳信仰」で、まず代表的なものが「小豆島八十八ヶ所霊場」です。

これは四国遍路にならって江戸時代に整備された巡礼ルートで、島内に八十八の札所があり、小豆郡史によると、1686 年頃に創設され、それ以前から島には、修験者や山岳信仰の文化があったとされています。そして、この巡礼文化は、単なる宗教行為ではなく、現在では「観光資源」になっています。

さらに、島の祭りや芸能も宗教と密接であり、秋の太鼓祭りや肥土山の虫送り、農村歌舞伎などは、五穀豊穰や厄除けを祈る宗教的行事として始まり、現在は観光イベントの一面もあります。

その中でも特に「お接待文化」は、お遍路さんにお茶やお菓子をふるまう風習で、今でも小豆島に残っております。小豆島は、宗教資源を観光に活用しやすい条件がかなり揃っていると言えます。

そこで小豆島八十八ヶ所霊場や農村歌舞伎など、小豆島の文化財をさらに観光資源として活用するには、「巡礼文化」「島の暮らし」「瀬戸内アート」「国際交流」を組み合わせることが重要で、単なる「お寺巡り」ではなく、「体験型・滞在型観光」に発展させることで、若年層や海外観光客にも広げられると思いますが、今後、土庄町で考えられるこれらを生かした活性化プランについて問います。

○議長（濱野良一君）

商工観光課長 蓮池幹生君。

○商工観光課長（蓮池幹生君）

それでは、宮原議員のご質問にお答えいたします。

小豆島八十八ヶ所霊場は、開創から長い歴史を持ち、本町の歴史的・文化的資源として稀有なものであると同時に、島民の精神文化や暮らし、また伝統行事などにも深く根ざしております。近年では、癒やしや健康づくりを目的としたウォーキング、あるいはインバウンド旅行者の関心を集めるコンテンツとしても注目されており、地域の観光振興において大きなポテンシャルを秘めていると認識しております。

一方で、行政として特定の宗教団体を直接的に支援したり、宗教活動そのものを助長・促進することは控えなければならないなど、踏み込みにくい側面もあります。

しかしながら、霊場や遍路道が持つ「歴史的・文化的遺産としての価値」や「地

域振興・観光資源としての魅力」に着目し、公益的観点からこれを活用し、環境整備を行うことは、行政として果たすべき役割であるとも考えられます。

これまでも、小豆島山岳霊場での護摩焚き体験や阿字観瞑想体験ツアーの開催、ガストロノミーコンテンツを活用したお遍路で楽しむ小豆島の食文化体験ツアーの開催、また遍路道を活用したハイキングコースの整備や、小・中学生や学生を対象とした卒業遍路など、小豆島の霊場を活用した多くの事業が実施されてきております。また両町で策定しました「小豆島観光ビジョン」においては、基本戦略として「小豆島ならではの体験コンテンツの強化を図る」ことが記されており、そのアクションプランでは「歌舞伎、太鼓、お遍路」といった和文化を体験できるコンテンツを造成することとされているところです。

町といたしましては、小豆島八十八ヶ所霊場会関係者の皆さまの自主性や、信仰の場としての厳粛さを尊重し、適切な距離感を保ちつつ、文化の継承や地域経済の活性化という共通の目的に向けて、連携、協力できる分野において積極的な取り組みを進めてまいりたいと考えております。

○議長（濱野良一君）

生涯学習課長 岡本高志君。

○生涯学習課長（岡本高志君）

宮原議員のご質問にお答えいたします。

生涯学習課からは、文化財の観光振興への活用についてお答えをいたします。

近年、国においては文化財保護法が改正され、従来の保護という視点に加え、文化財を地域活性化の原動力として活用していくという方向性が打ち出されております。本町におきましても、貴重な財産を次世代へ確実に継承していく保護を前提としつつ、それをいかに観光振興に結び付けていくかという活用の視点についても、あわせて考えていく必要があると認識をしております。

議員ご提案の、文化や文化財を生かした体験型・滞在型観光につきましては、関係人口の拡大や地域経済の活性化において、一つの有効な視点であると考えております。

しかしながら、文化財は一度損なわれてしまうと二度と元に戻らないという点や、担い手不足などによる継承の難しさといった課題を抱えております。

そのため、過度な観光利用によって文化財の保存環境や伝統的な価値が脅かされることのないよう、適切なルールづくりなど、慎重に見極めるべき課題も存在いたします。

一方で、全国的な知名度や希少性が乏しい一般的な文化財では、なかなか集客が難しいという観光現場における実情もございます。

このようなことから、観光振興を所管する商工観光課をはじめとする関係機関とも緊密な連携を図りながら、本町の文化的財産を適切に守り、持続可能な形

で観光資源として活用できるよう、また、単体では訴求力が弱い文化財であっても観光資源として有効に活用する方策などについて、知恵を出し合って研究してまいりたいと考えております。以上です。

○議長（濱野良一君）

宮原隆昌君。

○11 番（宮原隆昌君）

詳しく説明していただきました。

小豆島観光協会によりますと昨年、2025 年、小豆島に来られた観光客は 105 万 6000 人で、そのうち宿泊された観光客は 30 万 8842 人、その中で、外国人は 5 万 1331 人、外国人のうち、最近多く見られる台湾からの観光客は、約 2 万人前後と聞いております。日帰りですと、さらに相当な数になります。

また、先ほど商工観光課長から答弁ありましたが、小豆島観光協会において、今後 5 年間で取り組む、基本戦略に基づくアクションプランの中に、小豆島での体験コンテンツを図るということで「農村歌舞伎、太鼓まつり、お遍路」といった文化を体験できるコンテンツを造成するという取り組みがなされており、今年は池田地区の長勝寺や保安寺を中心に、そして来年度には西光寺を中心に迷路のまちの観光コンテンツの造成やプロモーションフィルムの作成が計画されていると聞いており、大変期待しているところです。

そんな中、西光寺には先日台湾から、中国や台湾で広く信仰されている「媽祖（まそ）の神様」をお招きしており、これを観光資源として活用することは、台湾との交流を結びつけるユニークな取り組みになり得ると思います。

行政と宗教、難しい一面もございますが、最後に私が現役時代にお仕えした三木佑二郎元町長が、以前書かれた書物の中に「小豆島にはまだまだ隠れた魅力がいっぱいあるが、私は景色と食と特産物に加えて、お祈りとかお参りのように、心に安らぎを与える要素が必要だと思っている。したがって島の歴史や文化に貢献した八十八ヶ所めぐりを島の観光に加えることは、小豆島の新しいイメージを作る重要な条件になる」と書かれていることを紹介して、質問を終わります。ありがとうございました。